

四の読音について

瀬戸 宏

日本語を学んでいる外国人から、時々日本人ではあまり問題にならないようなことに困難を感じるという訴えられることがある。ここでとりあげようとする四の読音も、その一つである。確かに四の読音には、シ・ヨン・ヨ・ヨッ・ヨツと五通りの読みかたがありしかもイチ・ニ・サン……の音読みの系列に訓読み系のヨン・ヨなどが混じるのであるから、考えてみれば、外国人が混乱するのも当然と言えよう。四の読音については、日本放送協会の日本語発音アクセント辞典が一定のまとめを行っている。しかしこれは四の読音のすべてを網羅したものではなく、また何と読むかはわかってもなぜそう読むかは必ずしも明確ではない。この機会に、四の読音についてささやかなまとめを行ってみたい。

まず始めに、各読音をもつ語彙を列挙してみよう。(ここに挙げた語彙は、岩波国語辞典・三省堂国語辞典・新明解国語辞典・明解日本語アクセント辞典・日本語発音アクセント辞典に見出し語として収録されている語彙をもとにしそれに日本語発音アクセント辞典付録「数詞・助数詞の発音とアクセント」で扱われている語を補ったものである。——はヨンとの入れ替えが可能と日本語発音アクセント辞典が認めているもの。)

シ……四書・四角・四角い・四角四面・四角張る・四辺・四辺形・四方・四本柱・四分五裂・四月・四季・四周・四散・四天王・四万六千日・四面楚歌・四六判・四捨五入・四冊・四恩・四の膳・四半期・四郎・四国・四肢・四則・^{しじゅうから}四十雀・四手・四匹・四巡・四球・四分・四分六分・四分板・四半斤・再三再四・四苦八苦・四十肩・四十七士・四十九日・四十八手・

四重奏・四重唱・四部合唱・四の五の・四五回・四五箇月・四五本・四五遍・四五冊・四五時間・四五年・四五日・四肢など

ヨン……四か月・四組・四尺・四個・四輪車・四期・四階・四倍・四番・四冊・四軒・四秒・四分・四歳・四種・四回・四寸・四丁目・四百・四千・四万・四億・四課・四乗・四度目・四位・四問・四合・四羽・四曲・四貫・四斤・四敗・四拍・四版・四票・四着・四銭・四層・四升・四艘・四足・四幕・四ページ・四ダース・四キロ・四センチ・四メートル・四オクターブ・四アール・四ブロック・四リットル・四Hクラブなど

ヨ……四時・四時半・四代目・四代・四名・四面・四隅・四人・四品・四年・四度^{よど}・四段・四箱・四枚・四円・四台・四番・四月・四方・四畳・四畳半・四時限・四次元・四揃い・四通り・四幕め・四年忌・四色・四十路^{よそじ}・四幅布団^{よのぶとん}など

ヨッ……四日・四日市・四人・四つ

ヨツ……四(つ)角・四(つ)切・四(つ)目・四(つ)足・四(つ)折・四(つ)辻・四つんばい・四(つ)手・四(つ)相撲・四(つ)竹・四(つ)球・四(つ)葉・四(つ)身・四(つ)児など。

まず、音読み系のシからみていこう。すぐにわかるのは、四書・四声・四天王など中国や日本の古典に関係した古い語彙が多いことである。ここに挙げたのは、小型の国語辞典に載っている語彙、すなわち現代日本語で一般に使われている語彙であるが、漢和辞典を調べてみると、四友・四霊・四漏などさらに多くのシと読まれる語彙が収録されている。江戸語大辞典(講談社)にも、四百人講^{しひやくにんこう}・四分一^{しぶいち}・四文銭などの語彙がある。

もう少し四をシと読む場合について考えてみよう。四書とは、論語・孟子・大学・中庸という儒学の四つの経典のことであり、その意味内容ははっきり決まっている。四角はどうか。これも四つの角ではなく、方形のことである。四声は単なる四つの声または四番めの声ではなく、陰平・陽平・上声・去声の中国語のアクセントを指す。四番めのアクセントの去声は

(第)四声とも書くが、この場合はシセイではなく、四番めという順序を表すヨンセイである。同様に、四十七士といえば、四十七人の弁護士や代議士ではなく、忠臣蔵の赤穂義士のこと、四十九日は単なる四十九日めではなく、人が死んで四十九日めに行う法事のことである。

このように考えていくと、四をシと読む時は古語の名残であり、同時に「四つの」という基数詞や「四番めの」という序数詞の性格はもはや薄れ、具体的な意味内容をもった普通名詞化している場合だ、ということが、わかってくる。むしろこう考えた方が、四季がなぜヨンキやヨキではなくシキか、四月がなぜヨンガツやヨガツではなく、シガツか説明しやすいように思われる。四季は単なる四つの季節ではなく、一年を構成する春夏秋冬のことであるし、四月も単に四番めの月を指すのではなく、春の April のことであるからである。

また、四をシと読む場合、その前後に三……とか五……とかいう語彙が存在しない場合が少なくないことも、もはや基数詞・序数詞としての性格が薄れている、という見方を裏付けていると思われる。四散・四方・四天王はあっても、三散・五方・五天王はない。四半期も古語の名残ではないが、やはり三半期・五半期は存在しない。再三再四や四苦八苦は、それだままとまった一つの言葉である。四周には、三周や五周があるが、これは意味がまったく異なる。(「グラウンドを四周する」がシシユウではなくヨンシユウであることはいうまでもない)

ただ、先のリストの中には、このような考えかたがあてはまらないようにみえるものもある。たとえば、四重奏・四重唱は、「四人の歌手による重唱」・「四つの楽器による重奏」であり、序数詞としての性格をもっており、問題が残る。しかも古語の名残ではないから、なおさらのことである。このほか、四部合唱も同様である。

もっとも、日本国語大辞典(小学館)はヨンジュウソウ・ヨンジュウシヨウ・ヨンブガッシヨウを見出し語に採用している。また、音楽関係者に

よると、最近ではヨンジュウソウ・ヨンジュウショウという人が増えており、音楽界ではこう言ってももはや間違いとはされないとのことである。

そこで本当に問題が残るのは、四五日・四五冊・四五人など四五……の一連の語であろう。これは現在のところヨンまたはヨとおきかえができず、しかも基数詞としての性格を有しているからである。これは現段階では例外としておくほかない。シ・ゴで二音節になることと、関係があるのだろうか。ただ、この場合も、三四冊・三四本・三四回になると、一般にはいづれもシとは読まず、ヨンとなるようである。また、三四日はサンヨッカである。(東京語のアクセントを示す明解日本語アクセント辞典はサンシカイ・サンシカゲツ・サンシサツ・サンシヘン・サンシホンを見出し語にあげている。しかし私の周囲でこのように言う者は、東京生まれの東京育ちという人を除きほとんどいなかった。共通語のアクセントを示し日本語の規範化をめざした日本語発音アクセント辞典にも、これらの語は採られていない。共通語では、この場合ヨンと読むとかんがえていいのであろう。)

ところで、一部の辞書、たとえば新明解国語辞典(第三版)や例解新国語辞典は「四・し」の項で「『死』に通じるので忌むむきは、これを用いるのを避けたり、和語で『よ(ん)』と言い替えたりする」「『し』は『死』を連想させるので、さけて『よん』ということもある」と記している。しかし、今まで述べてきたことと考えあわせれば、これらの記述はいかかなものであろうか。「忌むむきは……たりする」「……ということもある」という記述からは、四をシと読むかヨ(ン)と読むかは恣意的なものだ、という印象を受けるが、現代日本語では先にみたように、一部の場合を除いて、四をシと読む場合はすでに意味内容がはっきり決まっており、恣意的な言い替えを許すものではないからである。また、この記述では、シがヨンと読み替えられるようになったのは、シが死に通じるからだということになる。たしかにそういう理由もあるのであろうが、はたしてそれだけであろうか。もしそうなら、現代人よりはるかに迷信深かったはずの江戸時

代の人々は、かえって現代人より四をシとずっと多く発音していたことになる。むしろ、四をシと読む時に起こりやすい母音の無声化を避けるため、つまり、言いにくさを避けるためではなかろうか。数詞の中で、七・シチも母音の無声化がおこるが、これも最近ではナナと言い替えられる場合が多い。

次に訓読系のヨン・ヨ・ヨッ・ヨツについて考えてみることにしよう。まず、使用例の少ないヨッ・ヨツから考えることにする。

ヨッについては、各種辞典は、上記の四日・四日市・四つ・四人しかあげていない。このうちヨッタリは、もはや一般には使われない語彙であろう。四日市も現在では固有名詞であり、しかもこれは四日の派生語である。現代日本語で四をヨッと読むのは四日・四つの二つだけと考えてよいようであり、外国人に教える場合は、四日・四つはむしろ一つの語彙として教えたほうがよいであろう。

ヨツについてはどうか。これも先にあげたものをみると、もはやほとんどが基数詞や序数詞としての性格を失っている。四角・ヨツカドとは「十字路を挟んで対角状に頭を寄せ合った四つの直角の先端」(森田良行「基礎日本語」3)であり、単なる四つの角ではない。四辻・四つ切・四つ折・四つんばいも具体的な意味内容をもつ語彙であり、また三つ切・五つ折などという言葉は存在していない。四つ目については、現代日本語の四つ目は、「四つの目」という基数詞としてよりも、四つ目垣のように四角形を組み合わせるという普通名詞としての意味あいのほうが濃い。四つ手も「四すみを竹で張り、水中に沈めて魚を捕える網」(新明解)のことである。四つ相撲・四つ竹もやはり具体的な意味内容をもっている。こうしてみると、ヨツと読む場合も、もはや基数詞・序数詞としての性格が薄れ、普通名詞化したものと考えてもよいのではなかろうか。

もちろん、ヨツの場合も四つ葉・四つ児のように問題の残る言葉がある。ただ、四つ葉は、現在は主に「四つ葉のクローバー」に使われ、一般の場合は四枚葉・ヨンマイバであろう。四つ児も最近排卵誘発剤が開発さ

れるまで、実際にはほとんどありえないものであったことと何か関係があると思われる。

なお、ヨツの後に付く言葉がすべて訓読語であることに注意しておきたい。これに対してシの場合、後につく言葉は、「四の五の」や「四十八手」「四の膳」のような例外を除き、一般に音読みの漢語であった。

そこで問題は、数の多いヨとヨンに移ってくる。

さきほどのリストをながめていると、ヨとヨンの場合は、シ・ヨッ・ヨツと異なり、相互に入れ替えが可能な語彙がかなりあることに気がつく。この場合、ヨとヨンを入れ替えても、大部分は意味に変化がないが、中にはヨとヨンで意味が異なってくると思われるものがある。たとえば、これは筆者の語感によるものであるが、四段をヨندانというとは階段などの段、ヨダンというとは柔道などの段位を思い浮かべる。同様に四段目をヨندانメというとは階段の四つめ、ヨダンメなら仮名手本忠臣蔵の判官切腹・城明け渡しの間を連想する。最近の書籍は一般にルビを振らないので、文献からこの問題を解明するのは困難であるが、私と同世代の友人は、一般に私と同様の語感を持っているようである。この場合、ヨと読む時は柔道の段位や忠臣蔵のように日本の伝統文化と結び付く語彙であることに注意しておきたい。

それでは、ヨンと入れ替えのできないのはどんなものであろうか。日本語発音アクセント辞典の付録の「数詞・助数詞の発音とアクセント」第三表で、ヨと読むもののうち、ヨンと入れ替えができていないとされているのは、四人前・四代目・四時間・四時・四円・四人・四年・四畳・四揃いの九個であり、同第四表の所属助数詞一覧所載のものを加えれば、四時限・四次元・四年生・四年忌・四番手・四里・四字・四月・四件・四つかみ・四続き・四つまみ・四所・四柱・四昔の十五個、合計二十四個となる。このうち四人前・四時間・四年生はそれぞれ四人・四時・四年の派生語である。さらに、四番手・四代目・四里・四字も私の語感ではヨンとの入れ替えが

可能であり、このことは同世代の友人にも確かめた。四時限・四次元・四円・四畳・四揃いについては、友人の間でも意見が分かれたが、ヨンと読むのが絶対に間違いだと言う人はいなかった。

もちろん私の限られた調査では、これがただちに日本語の現状の平均を反映していると言い切ることはできないが、日本語発音アクセント辞典も刊行後20年近く経過しており、日本語の現状と一定のずれが生じていることはありうることである。

もう一度ヨとのみ読む場合をみると、先の二十四個以外では四隅・四方・四十路などがあるにすぎない。しかも四十路・四つかみ・四続き・四つまみ・四所・四柱・四昔は、現在では一般には使われない語といってよいであろう。こうしてみると現代日本語では四をヨとのみ読むものは思ったほど多くないことがわかる。このうち、四隅・四方・四畳半は、もはや普通名詞化している。四畳と違い、四畳半は日本家屋の間取りの一つの規格を表す言葉である。四時の場合は序数詞とも言えるが、同時に単なる四番めの時間ではなく、早朝・夕方の特定の時間を表わすかなり具体的な意味内容をもっていることにも注意したい。ただし、四時間（目）の場合は、完全な基数詞・序数詞である。

最後にヨンであるが、これは先のリスト以外にもまだかなりの数にのぼる。シ・ヨと入れ替えのできるものまで含めれば、基数詞・序数詞の読音の大部分を占めるといってもよいであろう。ここで注意したいのは、四が外来語系統の語と結合する時はすべてヨンと読まれ、他の読みかたと入れ替えができないことである。このことは、シ・ヨ・ヨツが、古語の名残または日本の伝統文化と関連する語と結び付いている場合が多いのと比べて、興味深い。以上のように考えてくると、一つの仮説がうかびあがってくる。それは、現代日本語では四の読音は、基数詞・序数詞としての性格が弱くなり普通名詞化したものを除いて、他はすべてヨンに向かって収斂しているのではないかと、ということである。このように考えると、

四重奏・四重唱がヨンジュウソウ・ヨンジュウショウと読まれるようになり、またシやヨとよまれるものが、ヨンと入れ替え可能な理由も説明できるのではないかと思われる。(日本国語大辞典には、ヨンは「よ『四』の変化した語」とあり、ヨより新しいものであることは、明らかである。)あるいは、一音節のヨ・シよりも二音節のヨンを好む傾向が、日本語の中にあるのかもしれない。

ただ、この仮説では、四人・四年・四時間のような日常生活で極めてよく使われる語がどうしてヨンといえないのか説明できない。外国人に四の読音を教える場合、現段階では例外としておくほかない。

最後にまとめを兼ねて、外国人に四の読音を教える場合留意すべき事柄を列挙してみたい。

①四をシと読む場合は、四五日などを例外として、他はもはや基数詞・序数詞としての性格が弱まり普通名詞化している。この場合、四の後には一般に音読の漢語がくる。

②四をヨッ・ヨツと読む場合も、同様に基数詞・序数詞としての性格が弱まり普通名詞化している。この場合、四の後には、訓読みの和語がくる。

①②とも、ふつう古語の名残が多い。

③基数詞・序数詞としての四の読音は、今日では一般にはヨンであると教えてよい。ヨと読むものも多いが、ヨンと入れ替えられるものが少ない。ただし、四時・四年・四人のように日常生活で極めてよく使われるものの中で、ヨンと入れ替えられないものがあるから注意を要する。

④四が外来語系統の語と結合する場合の読音は、すべてヨンである。

本稿が、外国人の四の読音への疑問を少しでも解く手掛りになれば、幸いである。

本稿を書くにあたり、いろいろ御教示下さった皆様・諸先生にお礼申し上げます。

(1984. 12. 17)

(1985. 2. 10修正)